

岡本韋庵『勅語演説』翻刻・訳註

有馬卓也

はじめに

教育勅語が發布された明治二三年、時の首相は山県有朋（注1）であり、文相は芳川顕正（注2）であつた。この両者はともに古くから岡本韋庵と関わりのあつた人物であり、時に韋庵をブレーンとした。筆者は韋庵が教育勅語に対して少なからず関与したのではないかと考えている。この問題に関する結論は、今後の韋庵による教育勅語に対する見解をまとめ整理することを必要としよう。

さて、韋庵が上梓した勅語注釈に『教育勅語正解』（注3）がある。これに加えて未刊行の『勅語演説』（注4）及び『勅語大意』（注5）、『教育勅語正解』『教育勅語頌解』『教育勅語衍義』（注6）があり、岡本は計五種の勅語関係の著述を準備していたことになる。この五種のうち、浄書されたのは『教育勅語正解』及び『勅語演説』『勅語大意』の三点であり、前二者は漢字片仮名交じり文、後者は漢文で書かれている。それぞれの勅語に対する著述がいかなる関係にあるものか、また岡本の勅語に対する意識を論じる前に、まず『勅語演説』及び『勅語大意』の翻刻作業から着手せねばなるまい。本稿

はその第一段として『勅語演説』の翻刻を試みる。

この『勅語演説』は、冒頭に勅語を載せ、続けて四段に分けて勅語の解説を行うという形をとっている。しかしながら、本書は勅語の字義を一つ一つ解説していくという注釈書の性質をもたない。注釈書としては『教育勅語正解』及び『勅語大意』の方が正統であると言える。本書は教育勅語の志向する所を岡本韋庵が自らの見識に基づいて噛み砕いて説明したものと見えよう。また第三節に「嗚呼、生徒諸子よ」とあり、「前日筑前行軍の時、その戦地に分捕りたる兜及び物品を見来るにあらずや。諸子よ……」とあることから推せば、明治二七年七月から明治三〇年三月までの、韋庵が徳島中学校長であつた時に書かれたものと推定される。そして本書の最大の特色は、『日本書紀』をはじめとする六国史や『大日本史』をベースとして歴代天皇に明らかなる知仁勇を説く第二節、忠孝を強調する第三節にある。したがって、この著作は岡本のその他の思想啓蒙系著作を読み解く場合に於ても極めて有効なものと言えよう。

本書には、たとえば夫婦の在り方の問題、或いは女性の在り方の

問題などの点に於て、或いは皇室の位置づけの問題について、現代の考え方にはそぐわないものも含むが、当時の岡本の主張を知ると、
いう点を最重視して、ここに翻刻することとする。

—注—

- (1) 一八三八〜一九二二。山県が陸軍卿であった明治七年頃は岡本も陸軍省に所属しており、この時期から交際が始まったと推定される。
 - (2) 一八四一〜一九二〇。芳川と岡本は同郷同門であり、明治二九年、岡本は芳川の半生記『越山先生伝』を著している。
 - (3) 明治三二年・吉田章五郎発行。日本大学精神文化研究所・同教育制度研究所『教育勅語関係資料(第六集)』(昭和五三年・創文社)所収。
 - (4) 徳島県立図書館岡本章庵先生蔵書及著作目録1-3-15(131)、下書草稿1-3-16(132)。
 - (5) 徳島県立図書館岡本章庵先生蔵書及著作目録1-3-13(129)、下書草稿含む。
 - (6) いずれも徳島県立図書館岡本章庵先生蔵書及著作目録1-2-14(130)。すべて下書草稿。
- 一、原本は岡本章庵による直筆写本。徳島県立図書館所蔵(岡本章庵先生著作及蔵書目録1-3-15(131))。
- 一、原本は漢字片仮名交じり文で書かれているが漢字(旧字・俗字は新字に改めた)平仮名交じり文に改めた。

凡例

- 一、明らかに誤字とわかるものは訂正し註記した。
- 一、原本中に漢文で標記されている部分は書き下し文に改め、原文を註記した。

一、原本中の割注は「」で括った。

一、翻刻中の句読点、濁点、平仮名によるルビ、及び「『』」は筆者が加えたものである。

一、一、四の分節は筆者が施した。また各節の冒頭の勅語の文章は便宜上ゴチとした。

勅語

朕^お惟^{ただ}ふに、我が皇祖^{みまづ}皇宗、国^{くに}を肇^{はじ}むること宏遠に、徳を樹つること深厚なり。我が臣民、克^{よく}忠に克^{よく}孝に、億兆心を一にし、世世^{よから}厥^{その}美を濟^なせるは、此我が国体の精華にして、教育の淵源^{もと}亦^{また}此に存す。爾^{なんぢ}臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉^{こうけん}己を持し、博愛衆に及ぼし、学を修め業を習ひ、以て智能を啓^{ひら}発し、徳器を成就し、進みて公益を広め、世務を開き、常に国憲を重じ、国法に遵ひ、一旦緩急あれば、義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如きは独り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顕彰するに足らん。斯^{この}の道は実に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱に遵守すべき所。之を古今に通じて謬ら

ず、之を中外に施して悖らず、朕爾臣民と俱に拳々服膺して、咸其の徳をにせんことを庶幾ふ。

明治廿三年十月三十日

御名 御璽

勅語演説

朕惟ふに、我が皇祖皇宗、国を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なり。

謹按、此をこの一篇の冒頭にして第一段とす。我が日本の国を定め建つるや、その初謀ること遠くして基の厚きを云ふ。伊弉諾・伊弉冉の二尊（注1）は、我が帝国の土域を開闢（注2）せられ、天地の化育を恭賛輔相して以て利用厚生（注3）の道を興し、又首出不群の皇子を生み給ふ。これ即ち天祖なり。天祖天照大神（注4）、乃ち聖乃ち神にして、明徳六合（注5）に照臨し給ふ。以て群神に命じて下土を平定し、天孫をして葦原の中国に居て、その主たらしめ、告げて曰く「豊葦原の瑞穂国は是子孫王たるべきの地なり。爾宜しく就きて治むべし。宝祚（注6）の隆、当に天壤（注7）と窮り無かるべし」と。仍りて天、璽鏡劍を賜はれり。それ鏡は至明にして照さざる所なく、物その情を通る能はずして知なり。

玉は温潤にして含蓄する所ありて仁なり。劍は断ずべくして断ず。勇なり。天祖、その徳を神器に寓し、蓋しこの道以て国を治むべく、民を安んずべしと云ふにあり。且つ「之を視る」と吾を視るが如くせよ」と告げ給ふに至りて、天祖聖慮の在らせらるる所窺ひ知るべきなり。彼の支那の聖主、天下を禪るに当りて、惟精にし惟一にして、允にその中を執ると、天祖の天孫に与ふる所、実に東西符を合するが如し。然かして彼は数世にして姓を易へ、我は則ち万世一系天壤と窮りなきは、即ち徳業の深遠なるを以てなり。それ人々固有し得る所より云へば、知仁勇は三徳なり。事を處して、その宜しきを得て過不及なきよりして云へば、中なり。人々の臨み行はざる可からざるよりして云へば、末段に所謂即ち「斯の道」なり。凡そ心身家国を修正治平する方法、之を外にして豈他道あらんや。これ天祖の天孫に授け給ふ所にして、列聖承繼永く其の業を墜さざる所以にあらずや。今且神武帝、当日の事業上に就きてこれを言はん。天祖の遺烈を受け東征の武略を奮ひ、八十梟帥・長髓彦・土蜘蛛等（注8）の醜類を掃攘し、数年ならずして鴻業を恢廓（注9）し給ふ。これ其の知にして勇なり。飽まで抗戦する饒速日（注10）、及弟猾、弟磯城等の降を許し、以て創業の用に供し給ふ。これその知にして仁にあらずや。外にして既に能く斯くの如く内にし、夫婦相和し、諸皇子兄弟相友愛し、相助けらるるもの、皆三徳の發見にあらざるなし。善く

天祖の遺志を継述せられしものと謂はざるを得んや。その事業の規模既に宏遠にして、道德の根本又深厚なり。人民の聚合順服し、以て億万年に至るもの、豈偶然ならんや。彼の海外諸国の禪讓放伐（注11）、或は一時政刑法律を以てその国内を制服するものと天地懸隔（注12）す。

— 注 —

（1）記紀神話上の国土創造神。最初に夫婦となつた男女二神で、国土の島を生んだほか、天照大神以下の多くの神を生んだとされる。

（2）天地の始まりのこと。

（3）物の使用を便利にして財を豊かにし、生活を厚くして民を楽にすること。

（4）記紀神話の最高神で、太陽神の女神とされる。

（5）天地と東西南北の四方のこと。

（6）天子の位のこと。

（7）天と地のこと。

（8）八十島帥は『日本書紀』卷三神武天皇戊午年夏四月に記述がある。

長髓彦は神武天皇の代の土豪族。『日本書紀』卷三神武天皇戊午年九月に記述がある。土蜘蛛は『日本書紀』卷三神武天皇己未年二月に記述がある。またすべて『大日本史』卷一本紀一に記述がある。

（9）城の外側を囲む大きな城壁のこと。

（10）饒速日は長髓彦の妹を妻とし、神武東征の際には、長髓彦を殺して神武天応に帰服した。『大日本史』卷一本紀一に記述がある。

（11）禪讓は天子が位を有徳者にゆずること、また放伐は惡虐な天子を追放または討伐すること。

（12）かけ離れていること。

二

我が臣民、克く忠に克く孝に、億兆心を一にし、世世厥の美を濟せるは、此我が国体の精華にして、教育の淵源亦實に此に存す。

謹按、此を第二段とす。臣民の克く忠孝なるは、神聖の感化陶鑄（注1）に成り立ちたるものにして、法律束縛の能く為す所にあらざるを見る。我が天祖至盛の明德、之を支那の陶堯虞舜（注2）に比して蓋過ぐるあるも、及ばざること無きなり。神武帝、神武の聖資を以て大統を繼承し給ひ、以て国基を立て鴻圖（注3）を拡充し給ふ。續きて神聖世世に出でさせられ、治めて教へ給ふもの、皆此の道を以てするにあらざるなし。然るに言揚げせざるの御国振りにして、唯之を心に得させられ、身に本づけ給ひ、その行実を以て臣民に率先し、之が模範とす。故に「克く孝」に「克く忠」なること、影の形に随ひ、響の声に應ずる如く、億兆の人民咸くその徳を同くし心を一にするに至る。これ豈徒法言語の能くする所ならんや。今又聖子聖孫の徳行事業を歴舉して略言せん。經靖帝は親しく神武帝の皇子にして、英偉剛果、神八井耳、命となく謀り、

不軌を図る手研耳を誅し、以て天位を正し給ふ（注4）。何ぞ其智にして勇なるや。先帝崩じて悲慕止むなく、諒闇に居り給ふ。何ぞ其仁なるや。崇神帝の如きは、神を敬し民を仁して賑恤（注5）勸農を本とす。又人民をして長幼の序を知らしめ給ふ。その詔に曰く「民を導くの本は教化にあり」と。垂仁帝は個儒（注6）にして大度あり、資性惻怛（注7）。倭彦命、薨（注8）じて近臣を持つて殉す。帝開きて之を側む。皇后崩ずるに至り、詔して殉死に代ふるに土偶を以てす。遂に以て永制とせらる。至仁と云はざるを得んや。応神帝、三歳にして皇太子たり。皇太后、政を摂すること六十余歳の久しき、尚ほ儲位（注9）にあり。怡々（注10）として色養し給ふ。史書曾て年邁齒頰（注11）の歎きあらせらるるを見ず。是を純孝にして且仁なりと謂はざるを得んや。且其の位に即き給ふや、百済学者王仁（注12）を徵さる。王仁、徵に応じ、『論語』を持し來りて之を獻ず。是より先、我が神聖、身を以て率先し臣民に教へ給ひ、絶へて文教の具あることなし。是に至りて文学教課の材料、亦初めて我が国に輸入せり。乃ち皇太子をして王仁に就きて学ばしめ、後遂に皇太子の御読書『孝經』を始とし、これを以て常典とするに至れり。蓋し帝の意謂らく「祖宗躬行感化を以て臣民を率うと雖、教課と為すべき文章ありて之を用ふれば、至簡にして且至便なり。況んや年を経ること既に久しく、土地彌広まり人民彌多きに於

てをや。実に我が国一層教育の光を加へたりと謂ふ可し」。仁徳帝は百姓の心を以て心とす。菲衣（注13）惡食し、宮室弊れて改め作らず。三歳課役を除せらる。これ皆仁心の仁政に發するものなり。仁徳帝・磯部皇子、并に仁賢・顯宗二帝御兄弟、共に前後比類なき友愛仁讓の方の出でさせ給ふものは、祖宗の御余澤、先帝の至徳とは云ふものの、文教の光を加ふるもの之が助を為すと言ふも、豈不可ならんや。仁徳帝・磯部皇子相讓り給ひて久しく帝位を囑ふするに至り、獻者此に獻じ、彼に致して遂に獻魚の腐爛するに至るは、友愛謙讓の余り、千古の美談と言はざるを得ず。これ独御国のみならず、外国の史書にも曾て聞かざる所にして、此を準則とせば、天下の兄弟たるもの定まると云ふべし。孝徳帝、国守を戒飾して曰く「凡治を欲する者は、君の若きも臣の若きも、當に己を正して人を正すべし。如し自ら正さずんば、何ぞ能く人を正さんや」と。帝の如きは真に学を好ませられ、学問の要を得させ給ふと云ふべし。大化五年。八省百官を置く。蓋しこの時既に式部省に大学寮を置けり。遂に天武帝に至り、京都に大学、諸国に国学を置き、又文武帝の時に至りて、大学に博士助教等の職を、国学に博士医師等の職を設くること、令に明かなり。此に至りて、我が国文教を拡充するの実形始めて現れたりと謂ふ（注14）べし。天智帝、性至孝にして、母帝に殯する（注15）こと六年。然る後登祚（注16）す。純孝にして至仁と言は

ざるを得んや。又能く学を好みて賢を尊み、学校を興し、以て教道を明にし給ふ。然して帝英資偉断、中臣鎌足と謀り、大姦入鹿を誅す（注17）。知仁男の資を兼子備へ給ひて、祖宗の志、帝に至り之を事業に発すと云ふべし。水戸の史臣（注18）曰く「崇神帝の規模、孝徳帝經綸の業、是に至りて大に備る」と。文武帝、資性寛仁にして、百姓を賑恤し、学を好み給ひ、始めて大学に釈奠の礼（注19）を行はせらる。又博く經史に渉らせ給ひ、令を撰定せしめ、以て天下に頒ち賜はる。初め天智帝令十二卷を撰せしめ、天武帝の時、之を修正し、帝の即位四年に至り、刑部親王藤原不比等（注20）に勅し、重ねて律令を選定せしめ、この時二官八省に改め、学事学職、悉く大学寮頭に管理せしむ。是に於て大に備はれり。桓武帝、英略世を蓋ひ知勇を兼ね備へさせられ、人を知りて能く任じ、又能く諫を納る。叛服常ならざる蝦夷（注21）を平定し、以て都を山城要害の地に遷し、永世不易の基を建つ。善く祖宗の志業を継述し、孝の大なるものと謂ふ可し。是に於て我が日本の大勢と規模、節目、亦大に備はれり。蓋し上代神聖以来、斯の道を心に得て身に行はせられ、一家仁にして一国仁に興り、上好む者あれば下必甚しき者あり。所謂寡妻に刑し、兄弟に至り、家邦に推及する、感化の徳教、連綿として絶へず。孝子義人輩出する必然なり。然りと雖、史書闕焉。その詳なること得て知るべからず。橘媛（注22）の日本武尊（注23）

に事ふる危を見て命を授くる如き、兄媛（注24）の応神帝（注25）に侍り親を思ふて已まざる如き、其の義其の仁、想ひ見るべし。調の伊企儼紀の男曆（注26）に副行して新羅の罪を問ふ。軍敗れて執へらる。新羅劫迫して之が禪を解き、その臂を露はし、日本に向け「日本の将、吾が臂を啜へ」と呼ばしむ。伊企儼紀、乃ち大呼して曰く「新羅王、吾が臂を啜へ」と。終に屈せず。その忠勇義烈、以て知るべし。橘逸勢の女の孝行、小野篁の至孝の如き（注27）、亦皆以て当時の流風遺韵の一斑を知るに足れり。今又後世に徴し、その二三を挙ぐ。難波部の安良売は筑前の人なり。父母に事へて至孝なり。父母没して後、常に墓を拝し、朝夕哀を尽す。年十六にして宗像大領宗形秋足に嫁す。秋足死す。遠近之を聘す。誓つて節を守る。州郡状を奉り、天長五年三月、詔して位二級に叙し、田租を免す。和邇部広刀自は加賀の人なり。年十四にして山城の人秦真勝に嫁す。夫亡するの後、冢側に廬すること三十余年。言此に及べば、悲泣すること初喪の如し。斉衡（注28）中、褒せられて爵二級を賜ふ。早部氏成部売は摂津武庫郡の人なり。年十六にひて右京の人文室武庫曆に嫁し、二十七年を歴て夫死。氏成売喪に居て礼あり、死に事ふること生に事ふるが如し。日に再食せず、遂に再嫁せず。貞観（注29）中、詔して位二階に叙し、田租を免じ、修身免役して、その門閭に旌表（注30）す。倭果安（注31）は大和添下郡の人なり。奈良の許

智磨は添上郡の人なり。果安、父母に孝に兄弟に友なり。又善く近地のもの飢え、或は病むあれば、必ず自己の食物を齎らし、巡視看養す。故に登美・箭田二郷の百姓、その恩義に感じ、之を敬愛すること親の如くするに至る。許智磨、性孝順にして、人と怨惡なし。嘗て後母の讒に遭ふて父家に入るを得ざるも、絶へて怨色なし。奉養彌篤し。和銅七年、二人の孝義を旌はし、終身、事を課する勿からしむ。網引金村は備後葦田郡の人なり。年八歳にして父を喪ふ。哀毀骨立す。尋で母亦没す。追慕益深し。景雲二年、詔して爵二級を賜ふ。其の田租を復して身を終ふ。矢田部の黒磨は武蔵入間郡の人なり。父母に事へて孝なり。生時色養し、死時哀毀し、各その心を尽さざるなし。齋食すること十六年間、一日の如し。宝龜三年、其戸徭を免じ、以て孝行を旌はす。伴の家主は安房安房郡の人なり。性至孝にして、父母没するの後、口滋味を絶ち、像を設け供養し、之に事ふる生時に異ならず。事聞して承和（注32）中、勅して三階に叙し、終身戸田の租を免じ、門閭に旌表す。丹生の弘吉は若狭遠敷郡の人なり。幼にして父を喪ひ、独り母と居り、力田して奉養し、朝夕毎に父の墓に詣り、亦皆懈ることなし。水旱風蝗、時に凶作ありと雖、独り弘吉が田畑は曾てその害を被ることなし。郷里以て孝感の致す所とす。事聞す。貞觀十二年、勅して位二階に叙す。下毛の公助が父武則は摂政兼家の隨身なり。嘗て父に従ひ右近の馬場に

賭射して勝つことを得ず、武則怒りて之を撻つ。公助伏して之を受く。人曰く「何ぞ逃れざる」。公助曰く「父老い足弱し。我を追ふて疾く走らば、恐くは転倒顛蹶（注33）せん。もし損傷あらば、これ吾が罪を重ぬなり。是に於て逃れず」と。聞く者感歎す。此皆神聖世々徳を積み仁を累ぬるもの、教育の淵源となりて、その流風余韵の陶鎔し出す所なり。中古南北朝前後、諸名臣の忠烈義氣の如き、既に人口に膾炙す。復た徴録するを須ひざるなり。之を要するに、忠孝の道は我が国の固有にして、一点外より加ふるものあるにあらず。中古支那に探る所のものは、之を以て我が道を文字に顯はすに過ぎざるのみ。今更に万国に超絶して光輝を宇内（注34）に発揚せんとすれば、則ち斯の道の振振に頼らざるを得ざるなり。況んや独り教化の人心に浸染するのみならず、三歳も課役を除き、又租税を免ずること、史書筆を絶たず。然かして刑を用ふること、又刑なきが如し。これ人民の感戴欽仰して、固結密着せざる能はざる所以なり。

我が天祖天孫の創業と聖子聖孫の守成と、その盛徳大業、悉く知仁勇の発見するにあらざるなし。又皇子后妃、不世出の姿を以て之を武略に発するもの、遠く祖宗の雄図を継ぎ、以て孫謀を貽し給ふにあらずや。景行帝、嘗て日本武尊に告げて曰く「親みを以てすれば、則ち朕が子なり。実は神人なり」と。是より先き、熊襲（注35）既に服し、復た叛す

るもの幾度ぞ。帝、日本武尊をして之を伐たしむ。尊謀を以て醜類を誅殺し、熊襲悉く平ぐ。既にして東北の辺境騷擾し、蝦夷悉く反す。尊奮つて曰く「熊襲既に平ぎ、東夷復た反す。知らず、何れの日か大平を見るを得ん。請ふ自ら行かん」と。帝乃ち斧鉞を授けて曰く「東夷、性強暴にして、蝦夷最強し。上古以来、未だ王化に浴せず。今汝猛きこと電雷の如く、向ふ所前なく、攻むる所必勝つ。之に視すに威を以てし、之を懷くるに徳を以てして、兵革を用いず臣順せしめよ。往きて賊境に臨まば、必ず徳教を宣告し、伏せざるあらば之を伐て」と。尊既に蝦夷の境に至る。夷酋等望み見て驚怖し、弓矢を投じて罪を請ふ。蝦夷遂に平ぐ。それ景行帝の指示の深慮遠謀あると、日本武尊の神武英略之を何とか言はん。然かして前後共に兵卒の力を用ふるあらずして、東西を平定す。何ぞ其勇にして知なるや。忽にしてその降を納る。何ぞ其仁なるや。嗚呼盛んなるかな、偉なるか神功皇后（注36）、先帝の不庭を征し、中道にして崩ずるを歎かせ給ひ、玉体婦人の御身を以て、続きてその威武を奮ひ、悉く妖氛を掃蕩し給へり。遂に新羅を征せんとす。群臣に告げて曰く「事成らば、その功を共にせん。成らざるときは、罪余が身にあり。」既にして之を征す。新羅王面縛して降を請ふ。群臣或は之を誅せんとす。皇后曰く「初め三軍に令す。降るものは殺すなかれと。今既に降る。之を殺すは不祥なり」と。

高麗・百濟、之を聞きて皆降り、西蕃を称するに至る。是我が帝國未曾有の偉勲にして、威武の大に海外に震ふも、實に是を以て初めとす。爾後我が国文教工芸の開けたるものも、蓋亦此に胚胎せり。史に曰く「皇后夙に聡明叡知にして、容貌壯麗なり」と。その外征の師を発するや、措置軍令、共に至らざる所なく、又その降を赦して之を用ふるものは、知勇の至り至仁にあらざれば、之を能くせんや。抑天祖以来、神器を相授受せられ、劍その一に居り、又国に名づくる細戈千足を以てし、神を祭るに刀矛を以てす。国を建つるの主義、亦以て知るべきなり。蓋国を治め政を為す、文武の二途にありと雖、豈武を以て主とするにあらずや。之が国民たるもの、この遺緒を継ぎ、以て威武を振張し、軍備を充実せざる可からず。況んや四面皆海にして勁敵（注37）の衝に當るをや。

— 注 —

(1) 段々と教化すること。

(2) 中国古代の聖天子、堯と舜のこと。

(3) 広大な領土のこと。

(4) 神八井耳命は神武天皇の第二子。神武天皇の崩後、庶兄で第一皇子の手研耳が二人の弟（神八井耳命と神渟名川耳尊）を殺害しようとしたので、弟と共に手研耳を殺害。帝位は弟に与え、自らはこれを捕佐した。『大日本史』巻一本紀一、巻八六列伝一三皇子一に記述がある。

(5) ほどこし恵むこと。

(6) 才氣が凡人にかけはなれて優れていること。

(7) いたみなしむこと。

(8) 崇神天皇の皇子。垂仁二八年、殉死者が陵域に埋められたが、数日死なずに星夜泣吟した。天皇はその泣吟を聞き、殉死を禁じたとされる。『大日本史』卷八六列伝一三皇子一に記述が見える。

(9) 皇太子の位のこと。

(10) 楽しむ様。

(11) 歳をとって衰えること。

(12) 伝説上の百濟からの渡来人。応神天皇の時に來朝し、『論語』『千字文』を伝えた。太子菟道稚郎子の師となり、履中天皇の時には内蔵の出納をつかさどったとされる。『大日本史』卷二三列伝一四〇文学一に記述がある。

(13) 粗末な衣服のこと。

(14) 原本は「謂ふ」を「謂つ」に作るが改めた。

(15) かりもがり。死者を葬る前に、死体を棺に納めて安置すること。

(16) 天子・天皇の位に登ること。

(17) 中臣鎌足(六一四〜六六九)。軽皇子・中大兄皇子らと共に大化改新に参画し、蘇我入鹿(？〜六四五)を倒し、孝徳天皇(軽皇子)即位の後は皇太子中大兄皇子とともに律令体制の基礎を築いた。死の際、藤原の性を賜った。『大日本史』卷九本紀九に記述がある。

(18) 水戸家の二代目藩主水戸光圀(一六二八〜一七〇〇)に始まる

『大日本史』全三九七巻の編纂事業に関わったすべての歴史家をさす。

(19) 牛や羊などのいけにえをそえて、古代の聖人や孔子を祭る礼。

(20) 六五九〜七二〇。鎌足の子。大宝律令の撰集に参画し、後修正して養老律令を完成させた。娘の宮子は文武天皇夫人、光明子は聖武天皇皇后となり、藤原氏繁栄の基礎を築いた。『大日本史』卷一三本紀一三に記述がある。

(21) 大和朝廷の東部・北部に住む種族の蔑称。

(22) 『日本書紀』卷七に基づく。荒れる海に身を投げて海神を鎮め、日本武尊の乗る船を救った。

(23) 伝説上の英雄。景行天皇の皇子であり、九州の熊襲、東國の蝦夷を征討し、東國からの帰途伊勢で死んだとされる。『大日本史』卷八六列伝一三皇子一に記述がある。

(24) 『日本書紀』卷一〇、『大日本史』卷七四列伝一后妃に基づく。兄媛は応神天皇の妻。

(25) 原本は「応神」を「神応」に作り間にレ点を付す。「応神」に改めた。

(26) 『日本書紀』卷一九、『大日本史』卷二三列伝一五〇義烈に基づく。

(27) 「橘逸勢の女」以下、「難波部の安良亮(『日本後記』)」「和邇部広刀自(『文徳実録』卷六)」「早部氏成部亮(『三代実録』貞観六年)」は、いずれも『大日本史』卷二四列伝一五一列女に基づく。また小野篁(八〇二〜八五二)は平安初期の学者・漢詩人・歌人で、『大日本史』卷二四列伝一四一文学二に伝記が見られる。

(28) 年号。八五四〜八五六。

(29) 年号。八五九〜八七六。

(30) 忠孝節義の人の家の門に天子または地方長官が旗を立ててその人を誉め表すこと。

(31) 「倭果安(『続日本紀』巻六)」以下、「奈良の許智磨(『続日本紀』巻六)」「網引金村(『続日本紀』巻二九)」「矢田部の黒磨(『続日本紀』巻三二)」「伴の家主(『続日本後紀』巻五)」「丹生の弘吉(『三代実録』貞観一二)」「下毛の公助(『古今著聞集』他)」は、いずれも『大日本史』巻二二三列伝一四九孝子に基づく。

(32) 年号。八三四〜八四七。

(33) つまづき倒れること。

(34) 天下のこと。

(35) 記紀に見える伝説上の種族。南九州に勢力をはって、大和朝廷に服属しなかったとされる。

(36) 原本は「神后」に作るが「神功」に改めた。

(37) 強敵のこと。

三

爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、学を修め業を習ひ、以て智能を啓発し、徳器を成就し、進みて公益を広め、世務を開き、常に国憲を重じ、国法に違ひ、一旦緩急あれば、義勇公に事じ、

以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如きは独り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顕彰するに足らん。謹按、是を第三段とす。蓋し陛下の臣民を教導し給ひ、深く聖慮を注がれし所、正に此に在り。「爾臣民」と呼び起させ給ひしを伺ひ、嚴として龍姿(注1)を咫尺(注2)に押し、玉音の耳底に徹するを覚へ、即ち躍りて之が教範に入らんとするの思をなせり。豈恐懼感戴して、誰かこの思を同ふせざらんや。それ身は親の技なり。遡りて之を考ふるに、吾が身は親の分身にして、同氣連体なるを以て、子の自由になし得べきものにあらず。其の生るるや之が懷に入り、之が背に負はれ、前後左右に縋り、父母を離るるなし。食ふに衣るに起居寒暖、皆親の世話ならざるはなし。実に罔極(注3)の洪恩、之を何とか言はん。稍知るあるに至れば、幼稚園に入るとか、又は六歳未満にても、形貌た大きくもあれば、強て小学に出し試み、尋常より高等より或は農商、或は工、或は漁の類にして、世々の恒産あれば、尋常か高等を卒ふれば、各又その業に従はしめざるを得ず。これ亦多少の浪費にして、親の力に頼らざるはなし、又昇りて中学に入るの杯、その心労如何ぞや。且其の費用莫大なれば、貴族富豪の輩は心配も少なければ、薄産少給の者にして相当の学資を取弁する、極めて難しとす。且それぞれその業を卒ふるには、一年二年の事にあらず。然かして子は月に年に成立に赴き、親は日に老衰し身体衣食共に意のままな

らざるなり。然らば則ち子たるもの、千辛万苦の勞を憚からず之が罔極の洪恩に報ひざるべからず。親はこの困難を凌ぎ色々と取弁し、以てその業を卒へしめ、遂に能く位官を添ふするか又は社会に立ち公益を謀る地位に至るも、幼少よりの教育と、斯く困難中に成し立てられしことは、知らざるが如く、余独り我が身の成し得たる顔して、大恩を報ぜんと思はず、父母は日に増し老朽し、間には田園家屋は已に尽くその子の資金に給して、遂に赤貧となるもの無きにあらず。然かして子たるもの、或は之を等閑に附するもの、世間往々之を見る。復何の心や。抑、父母に孝と云ふは、貴賤貧富を通じての御教なれど、正しく親々の勞費によりて、その身の成り立ちしものは、就中第一句の御旨趣、常に服膺（注4）せざるべからず。況んや忠臣は孝子の門に出づと謂ふにあらずや。夫善く親に孝なるものこそ、即ち帝室の忠臣にして、是聖慮を垂れさせ給ふ所以なれ。之に反する不孝者は固より位官杯添ふする理由なかるべし。豈亦社会に立ち公益を謀るの地位を占むることを得んや。父母と兄弟とは天然骨肉の組合にして、親の次は兄弟に若くものなし。兄弟姉妹は譬へば楷子の段あるが如く、自然前後の順序ありて、弟は兄に敬順を尽し、兄は弟を慈愛して、互に愛敬友于以て貧富苦樂を共にせざるべからず。夫婦は父母兄弟と替り他人を附合せ、以て祖先の繼嗣、又は祭祀をなすものなれば、尤、大切にして相和せざるべからず。然して和は別

あるを以て本とす。夫婦は固より陰陽自然の弁別あり。各、その別を失はず、女は夫の家に安んじ、男は妻の室に安んじ、以て各、其の分を守り、夫は義を以て率い、妻は之に聴従するの道を失ふ可からず。斯くありてこそ、永く親愛を全うし、繼嗣も出来れば、祭祀もなし得べし。若し弁別なくして愛情私慾に流れ、父母を疎じて専ら妻を親むに至れば、一家の治らざるのみならず、国家の大事をも誤る。その例し少からず。戒めざる可けんや。夫婦相和するに於て更に一言せん。凡そ妬心の甚しきは婦人に如くはなし。本妻あれど繼嗣なき時は、妾を買ふも余義なかるべし。今好色玩戯の為に夫婦不和の基を開き、之に加ふるに或は親子の親愛も失ふに至るあり。豈に畏れざる可んや。是に由りて之を觀るに、蓋西洋一夫一婦の論を以て良法とす。朋友は、同志同学等、意氣相投して組合ふものにして、信を以て主とす。互に忠告して善く導き、徳を修め文を学ぶの輔とするものなり。既に天合にあらず。又夫婦の如き、偕老同穴の契を結ぶものと亦自ら異なり、故に信なければ朋友の道は立たざるなり。凡そ人の世にある組合にて持ち居ること、恰も家を造るに土台は土台に、上は材は上は材に、中間の敷居鴨居と柱と、それぞれ組合成り立つが如し。今夫父子兄弟の組合二つの者は、天合の組合にして、夫婦朋友の組合二つの者は人合の組合なり。然して一般の人民、悉くこの組合を遁ること能はず。故に一家の組合、井然（注5）とし

て成り立つときは、一町村の治るなり。推して郡に至り県に至るも然らざるはなし。故に各県郡市長、善く聖慮を本体して衆庶を奨励率先し、町村長の又能く之を助くるあらば、聖慮を安じてさせ給ふも、遠きにあらざるべし。況んや全国学校々員、既に只^{ひたすら}管^{くだ}此に從事するに於てをや。恭儉己を辞するは、莊敬にして取締り、收斂^{しうれん}（注6）して放慢ならず、善く節してきまりあり、善く制してきりもりするを言ふ。然るに儉の一義、更に推言せん。衣食住始め諸器物に至り、内外の交際^{かうさい}迄、これを節制し儉約にして、人々各^{おの}その分を守り、僭せず濫せざる様にせざる可からず。今や我が国を通観するに、衣食住始め昔時に比すれば、奢侈華麗、幾倍なるを知らず。各^{おの}人民資用する所の出金額多くはその入金高より常に超過するに至り、漸次窮困に帰せざるを得ず。豈思はざるべけんや。人民悉く窮困するときは、その極端、国家に及ばざるを得ず。今や陰雨^{（注7）}せざるに及び、豈綱繆^{（注8）}せざるべけんや。博愛とは、人に接する上の本体なり。然れども之を發用するに至りては、次第順序なかるべからず。愛の尤^{もつとも}深く且厚きは、父母に如くはなし。随ひて祖父父母より伯叔父母兄弟に及ぼし、又大別すれば同姓親族より母族妻族の外戚に至るあり。或は吾が老幼を愛して人の老幼に及ぼし、又は民を仁して物を愛するの類あり。必其の浅深厚薄の次序を失ふべからず。学を修め業を習ふとは、道德の学に従事する者は経伝に本づき、修身倫理の

道を講究し、之を心に得て身に行ひ、又陸海軍に志あるものの如きは、各^{おの}その校に入り、又技芸の学・法工理化、又は農工商の類の如き、各^{おの}その師に就^つき、或は又その校に入りて之を受け、或は書によりて之を考査し、実地に試み行ふべし。之を修習すること歳月を積みて、その工夫を用ゆること久しければ、終に徳器を成就し、智能を啓發して、或は一世の師表となり、治化以て補ふべく、君徳以て輔くべし。或は千城の將校となり、以て国家を衛り、禍乱を防ぐべし。或は国家を富強にすべし。或は人民に幸福を与ふべし。是に於てか公益始めて拡充すべく、世務益^{ますます}開張すべし。それ憲法は政務の拠りて立ち、民の幸福之に拠りて保す。苟も國民たるもの、戦々慄々として常に警戒の心を失はず、之を遵守せざるべからず。又物毎^{ものごと}に規則法度のあるあれば、必ず之を服膺^{ふくよう}して踏み誤ることなかるべし。「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」と仰せ降さるこそ、尤難^{ありがた}有^あけれ、後にも細述せし如く、我が邦の君臣は、父子の親を兼子たるものなれば、一旦緩急、即ち内賊の起るあるか、或は外寇の来り侵すことあれば、義に拠り勇を奮ひ、身を犠牲に供し、以て上に奉じ万世一系の皇運を扶翼保護し奉るべきこと、実に我が國民の一大義務なり。此の如くして始て上は帝室に對し奉り、下は我が祖先に對して臣民たり子孫たるの責任を尽すと謂ふ可し。嗚呼、生徒諸子よ、胤永^{ひつひさ}（注9）が管て告げしことありき。「昔年歴游して鎮西に来るや、地方の人士は

慷慨志を談じ、義氣凜然たること余國に異なるを覺ゆ。今尚ほ然るあらん」と。又聞く「少年生徒、尚ほ徳性醇粹にして、師長に接するに、形を以てせずして心を以てす。以て教ふべし」と。今この名教を添ふし、感奮興起して措く能はざるものあらん。^抑又故老の口碑に存するを聞きしことあり。「胡元の大挙来寇するや、忽然海を蔽ふて至る。その跳梁猖獗（注10）、言ふべからず。彼の博多海岸より押して続々陸に上るを見るに、皆節制の兵にしてすさまじき勢とぞ、筑肥始め遠近の武士言ひ伝へ聞き伝へ、吾も吾もと得て物執りて争ひ來り、我劣らじと義勇を振るひ、無二無三に斬り立て、流石節制の兵も辟易して退去せり」と。賊や我が猛威に氣を奪はれ、又颶風（注11）の之を助くるありて、全軍覆没し、帰る者^僅に三人と。或は伝ふ「范文虎等十余万の兵を率い來寇するや、或は水城に或は志賀嶋に攻め寄せんとす。草野七郎・河野通有・安達次郎・大友藏人等、激戦奮闘し、賊等岸に上るを得ず（注12）」と。^蓋多兵処々に乗り込み、我亦各地に応戦遊闘す。故に戦地も固より一ならずして、その状況の異なること然るあるべきなり。是より先き北条時宗（注13）偉断以て胡使を斬り、彼の四百余州を震動す。然りと雖、此の時に當りて、上は陛下の勅念を悩まし奉り、時宗執掌以て戰士を聚合振励す。この一挙を上奏するに至り、始めて勅念を安んじ給ふ。^蓋時宗の喜折屨（注14）留ならず。嗚呼、諸子よ、この偉功を奏するは君達が祖宗。

諸君義勇の致す所にあらずや。若くは地方人々の聚合力と官兵の爲す所なること必然にして、^蓋疑を容れざるなり。前日筑前行軍の時、その戦地に分捕りたる兎及び物品を見來るにあらずや。諸子よ、祖宗の佩びたる刀劍、着たる甲冑、又は分捕りたる武器もありなん。若くは感狀記録の類もありなん。今勿体なくも朕が忠良の臣たるのみならず、「爾祖先の遺風を顕彰するに足らん」と仰せ下さるのみにあらずや。激昂奮奮以て公に奉じ、祖先の志業を継ぎ、之を拡充顕彰せざる可けんや。果して能く然るあらば、孝義の実、一世に揚り、皇運を扶翼する、亦既に此に在り。豈勉めざるべけんや。胤永、薄德菲才、豈慙愧義慕せざらんや。今幸にして乏きを此の仁里に承け、聖旨の難^{ありがたき}有に感激し、勃馬（注15）興起して伏櫪（注16）の情に堪へざるものあり。既に老いたりと雖、染めずして髮尚ほ黒く、補はずして齒尚ほ全し。疾馳健歩、亦以て諸子と争ふに足る。いざ事あらば同心協力、將に与に共にし、以て國家に報ふるあらんとす。今この演説を草するに臨み、躍然筆を投じて起つ。昔者、支那聖主の教を立つるや五教に帰す。孔子（注17）之を類別して曰「君臣なり、父子なり、夫婦なり、昆弟なり、朋友の交りなり」と。孟子（注18）之を釈して曰「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」。蓋^蓋天賦の性、即仁義礼智の四徳。父子の間に發出し、父慈に子孝に、以て親を成す。君臣の間に發出し、君令して臣供するの宜しき

を得、以て義を成す。夫婦の間に發出し、夫唱へて婦従ふ、男女陰陽自然の別を成す。兄弟の間に發出し、兄は弟を愛し弟は兄に恭順する、自然の次第あり、以て序を成す。朋友の間に發出し、相輔^{さう}けて相導き、共に才を違し徳を修むるの信を成す。

今我が聖明なる陛下の御教へ給ふ所は、「父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ」と、それ天祖天孫授受して列聖継述し給ふ。知仁勇の三徳は源泉なり。其の混々として流れ出で、或は江河をなし、或は沼池をなす如く、父子の間に流出し以て親愛の孝を成し、兄弟の間に流出し兄は愛し弟は順ふの友を成し、夫婦の間に流出し夫唱へて婦従ふの和を成す。朋友の間に流出し互に輔導し互に忠告するの信を成す。それこの知仁勇や、仁は人の本心なれば、礼知は包みて固^{もと}よりこの中に在り。勇は則義なり。故に三徳四徳と以て異なるあるにあらず。孝友和信、五教と亦二にして一なり。之を始めに原^{もと}くれば、天命ずるの性なり。之を分言すれば、曰く三徳なり四徳なり。之を約言すれば、即ち道なり。天祖以来この道を心に得させ、躬^{みづか}に行はせ給ひ、その実践を以て臣民を感化陶冶し給ふこと、幾千百年。故に世に孝子義人輩出して枚挙に遑^{いとよ}あらず。又三韓支那より文教の書籍も輸入し、逐次更に学校の設ありて、之が感化を助くるの具も粗^{あら}備はれり。然りと雖、未だ聖詔を以て名教を敷き給ふことあらざりし。降て隋唐の学風輸入し、留学生を遣り、彼に取るもの、その主とする所、この道にあら

ずして、制度文物の表面と詩賦文芸の末にあり。是に至りて、我が醇^{じゅん}料^{りょう}（注19）なる徳化の如きは、乃ち衰頹するの傾あるを覺ゆ。爾後明君賢相なきにあらずと雖、或は外戚強臣の国柄を執るありて、聖躬徳教の施及するを支ゆるものあり。所謂、其の膏に屯すること前後幾百年ぞ。今や大勢一変し、古に復して飛龍天に在り、皇澤六合に敷き、上意下通し、下情以て上達す。然りと雖、二尊開域以来、蓋^{けだし}三千余年、陵谷（注20）変遷し、土地^{いど}彌^よ開拓して、人民^{みん}益^{ますます}蕃殖す。之に加ふるに世界万国の交通、月に広く年に盛んにして、万種の教義書籍も輸入し、況んや異様人種の多く来りて、復た醇然たる帝国の旧にあらず。涇は渭を以て（注21）独り四維の繩張りの弛みしことも少しとせず。蓋^{けだし}陛下の聖慮を惱し給ふ所以ならずや。是に於てか皇祖玄宗の聖慮を継述して拡充し給ひ、御心に得させて全国に敷き教へ給ふ。蓋^{けだし}感化の及ぶ所のは、近狹にして敷教の及ぶ所は広遠なり。感化に本づきて之を施及するは、則ち前古未曾有の盛典にして、善美を画せる所以ならずや。抑^{おさ}我が帝国は、この道と天壤無窮に相伴ふの御国振りなれば、之が国民たるもの、必忠必孝必友必信必和にし、以て子孫万世この方針を誤らず、以て聖慮の懇篤なるに對答遵奉せざるべけんや。

我が日本の国を建つるや、天祖天孫、之が創業垂統の基を為し

給ひ、世々の神聖の出でさせられ、独帝室の力にて作りなし給ふ者なり。時に或は土壇山澤を開闢し凶逆妖邪を掃蕩し給ふも、皆帝室の力ならざるなく、兵を挙げ師を出し、不服不延を討するも、帝室の権にあり。人民を集合賑恤し教育して衣食せしむるも、亦皆帝室の権にあり。聚落郡村を成し遂に都を成し国を成すも、亦皆帝室の権にあらざるなし。凡百の事、曾て他力を借らることなし。然して所謂人民なるもの多くは帝室の疏族遠裔にして、蓋下能く上に安んじ、上亦下に安んず。之に加ふるに至仁至寛の政あり。年代の久遠なる相信孚（注22）し、以て自然に成り立つものとす。彼の陶虞の禪讓あるにあらず、殷湯周武（注23）の放伐あるにあらず。これ乃ち東洋に特立し、宇内無比の帝国たる所以なり。故に日本国土は帝室の所有物にして、政庁は帝室の朝廷なり。然らば則ち、彼支那の天下を官にするものと天地懸隔す。固より我が国の臣民は君臣の義にして、父子の親を兼ねるものとす。是を以て世々の君にして世々の臣なり。君道既に純にして、臣道亦純なり。周の頑民は殷の忠臣の如きものあることなく、況んや五代馮道（注24）の如きもの之あるに由なきなり。然して皇統万世一系天壤無窮なるは言ふを待たず。群下にありても同一系にして、万世子孫永く離るる能はざるものとす。彼の昔、支那の贊（注25）を納れ、始めて君臣の契約を結び、既に仕へて不可なれば則去り、三諫して聴かざれば則去り、之が契約を解くものと絶

へて別異す。我が国体既に異なれば、君臣の關係、亦自から異にして、結合の親密ならざるを得ざるものあり。然るに今此君臣の教目を挙げさせられざりしは、蓋能く忠に、義勇公に奉ずるの事を挙げ示し給へば、君臣の義目は言はずして明なり。況んや父子の親を兼ねる御国振りなれば、國民たるもの愛敬兼子尽さざる可けんや。

— 注 —

- (1) 天皇の姿のこと。
- (2) 近い所のこと。
- (3) きわまりがないこと。
- (4) 心によく覚えていて忘れないこと。
- (5) 物事に筋道がたつていて乱れない様。
- (6) ひきしめること。
- (7) 雨が降ること。
- (8) ゆるんだ所を固めて修理すること。
- (9) 秋月胤永（一八二四—一九〇〇）。幕末から明治にかけての儒学者。会津生まれ。昌平黌に学んで朱子学を修め、慶応元年、蝦夷地代官となる。維新後は太政官に出仕し、後年は東京大学高等中学校に奉職した。韋庵の著書『大日本中興先覚志』によれば、韋庵とは幕末以来の知己である。
- (10) 躍り上がり荒れ狂うこと。
- (11) 大暴風のこと。

(12) 『大日本史』卷二四三列伝一七〇諸蕃に基づく。

(13) 一二五一〜一二八四。鎌倉幕府八代執権。蒙古の使いをしばしば追い返し、西辺の防備を固め、文永・弘安の役に於て元軍を退けた。

(14) 齒の高い下駄の齒が折れること。喜びを矯め沈める様のこと。

(15) 元氣で盛んな馬。

(16) 馬が厩の中で寝ていること。或いは人の養いを受けること。

(17) 中国春秋時代の思想家。儒教の始祖とされる。

(18) 中国戦国時代の思想家。孔子の思想を継承し『孟子』を残した。

(19) 混じりけがないこと。

(20) 丘と谷のこと。

(21) 涇・渭ともに川の名。涇水は濁っており、渭水は澄んでいることから、清濁・善惡などの対比に用いられる。

(22) まこと・信用があること。

(23) 中国古代の殷王朝の初代湯王と周王朝の武王のこと。

(24) 五代の混乱期にあつて、四朝十人の君主に宰相として仕えた馮道

(八八二〜九五四、字は可道)のこと。

(25) にえ。君主に会う時に贈る礼物のこと。

四

斯の道は実に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱に遵守すべき所。之を古今に通じて膠らず、之を中外に施して悖らず、朕爾臣民と俱に拳々服膺して、咸其の徳を一にせんこ

とを庶幾ふ。

謹按、これを篇末の一段とす。遙に篇首に照応し、上文を承けて収結す。蓋前段臣民に求むるに至当の務を以てす。然かして終に臨み、陛下又親自ら臣民と共に俱にし、拳々服膺(注1)して率先し給ふ。聖慮の懇到謙抑(注2)なると猶々(注3)として俯して就かせ給ふの難有こと、之を何とか言はん。豈感奮に堪ふ可けんや。所謂「之を道くに徳を以てす」も、所謂「皇極を建つる」も、豈此に外ならんや。夫天祖天孫以来、聖子聖孫、四海の広き億兆の多き、之を治めて教へ給ひ、君師の事を兼子任じ給ふこと、固より既に顯然たりと雖、師の実ありて、師の名未だ見れざるなり。今この詔勅を以て名教を敷かせられ、是に於てか師道始めて立ち、教旨始めて明なり。人心頼りて以て一定し、国基頼りて以て鞏固(注4)なり。赫々乎(注5)として日の天に中するが如きなり。豈至正至大の盛挙ならずや。況んや我が聖明文武なる陛下の至然なる名教を御身にし、以て教へ給ふもの、現今三万余の学校校員、四千万の同胞と、誰か仰望感激して此に服従せざるものあらんや。抑斯の道は独五教の間に流通するのみならず、凡国民たる者、一身の出处進退より一挙動一言行に至るまで、悉くこの道に伴はざる可からざるなり。我が皇統の万世一系にして、天壤と共に無窮なるものは、神聖世々に出でさせ給ひて、斯の道を万世に流通貫穿して絶たざるを以てなり。

我が万国と対峙する所以の者も、乃ち彼の芸学技術にあらずして、斯の道を以てするのみ。それ道は本なり一なり。之を詳言すれば、仁義忠孝なり、廉耻礼讓なり。猶ほ衣服飲食の日に離る可からざるものの如し。豈遵守して力行せざる可けんや。芸学技術は乃ち末なり。国家の責あるもの、斯の道を以て大体本領とし、芸学技術を利用して、之が政略を施さば、則方針を誤ること無きに幾からん。(了)

―注―

- (1) 『中庸』に見える言葉で、両手で物を捧げ持つように、常に心に抱いて忘れずに守ること。
- (2) 十分に行き届いていることと、へりくだって仰ぐこと。
- (3) 順序正しいさま。
- (4) しっかりしていて動かないこと。
- (5) 明かで盛んな様。